

## 平成27年度 兵庫県立人と自然の博物館協議会

日時 平成28年3月8日(火) 14:00～15:30

場所 県立人と自然の博物館 大セミナー室

### 1 開 会

### 2 館長挨拶

### 3 議 事

#### (1) 報告事項

「ひとはくの概要」について

「ひとはくの事業活動」について

「ひとはくの研究活動」について

#### (2) 協議

「平成28年度 ひとはくの主な事業」について

#### (3) 施設見学

### 4 質疑・意見

#### ・博物館

最近、箱根を越えて東へ行くと、概ね話題は二つ。一つは2019年に京都で予定されている国際博物館会議に向けた対応をどうするか、もう一つは、2020年東京五輪・パラリンピック後のこと。このような中、博物館が地域の中でどういう役割を果たすかが問われている気がする。

文科省の方が、全国科学博物館協議会で講演された際、これからの博物館の役割として、半分くらいは地域活性化や地域活動の拠点としての役割が求められると話していた。今後、我々のような地方の博物館が、何をしていくのかというのが問われる気がする。

兵庫県でも、先日「環境学習教育基本計画」を知事に答申するに当たり議論した。中で集中的に議論されたのが、乳幼児期の子どもたちの遊びの問題だった。甲山公園と尼崎21世紀の森では、はいはい歩きの子ども対応の施設を作ろうという動きがある。

これらは公園だけれども、社会教育施設としてどう対応していくのかが、今後問われていくと思う。

本日は、ぜひ「ひとはく」の今後のあり方について、ご意見を頂戴したいと思う。

#### (博物館による事業報告)

#### ・委員

予算について、研究費はどれくらいか。外部資金も入っていると思われるが、どうなっているか。

- 博物館

27年度当初予算ベースで、2億7千6百万円の内、調査研究費が全体で約5,400万円ある。その内、受託研究が1千7百万円。

- 委員

活発に活動されているので、お金も時間的余裕も必要かと思う。このまま、研究活動を続けていっていただきたい。

- 委員

植物園に携わる者として、この博物館の標本が素晴らしいと思っている。これらの利用状況と、いつでも利用できるのか、外へ出すことは可能なのか伺いたい。

- 博物館

標本といっても全て一律に扱っていない。既に、いろんな形で利用されてきた標本も収蔵されている場合もある。長期間無傷で保管することが最大の目的ではなくて、いかに社会教育・生涯学習支援に活用できるかが主眼になっている。その中には、連携しているグループや他の館からの貸し出し要請があり、外に出しているものもあれば、館内展示で多くの方に見ていただいているものもある。

一方で、新分類群の基準標本として、これは博物館が世界中に対して半永久的に保管し、研究者の求めに応じて参照してもらう義務を負っているものであるが、これらはルールに則って閲覧することが出来るが、一般への貸し出しは必要最小限にとどめている。

- 委員

来年度の事業について、有馬富士自然学習センターのお話があった。この運営事業については三田市からお願いしたものだ。今まで市で嘱託やボランティアの方を使って、事業を行ってきたが、ソフト事業の開発等で限界を感じる所があり、ノウハウを持つひとにはお願いした経緯がある。ひとには、ぜひ魅力的なプログラムを実施していただきたい。経費的には十分ではないかもしれないが、よろしくお願したい。

- 委員

館の職員が駐在して、事業を行うのか。

- 博物館

駐在するわけではないが、館から近い場所なので足繁く通う事になると思う。

- 博物館

以前は、学習センター内に「ひとく研究室」というものを作っていたこともあり、研究員の姿をもっと身近に市民の方に見ていただくという取り組みをしていた。館の研究員が駐在す

ることはないが、従来勤務されていた指導員が4名と、学習センターと当館をつなぐ役割の方を1名雇って、緊密に連携を取って事業を進めていきたいと思っている。

- ・委員

これまで実施されていた Kids サンデーと、この事業との関連はどうなっているか。

- ・博物館

Kidsサンデーは、JSTからの補助金を活用して、5年間継続して事業を行ってきた。その中で、子ども向けプログラムの開発に力を入れてやってきた。そこで作ったプログラムを、有馬富士自然学習センターのフィールドで役立てたい。

Kidsサンデーは、来年度も当館で継続するし、今後は有馬富士自然学習センターのプログラムと、当館のKidsサンデーのプログラムとをタイアップしながら、両者ともに楽しんでもらえるものにしたい。

- ・委員

先ほど、館長からヨチヨチ歩き頃の教育を考えないといけないとの話があったが、就学前の子どもたちから Kids サンデーでは対象にしているが、有馬富士自然学習センターでの対象は、どの辺りまでを考えているか。上は小学生、中学生までを対象にしているのか。

- ・博物館

学習センターの来館者を見ていると、ヨチヨチ歩きからベビーカーを押したお母さん、小学生までがメインとなっている。ひとはくでは小学生から中学、高校、(28年度事業計画で挙げた、台湾への高校生派遣事業をはじめとする)大学へ向けてのプログラムを組んでいるので、両者がうまく連動できると思う。

- ・博物館

子どもを増やせと日本中の行政が言うが、我々が乳幼児について議論する際、はいはい歩きの頃から子どもが遊べる環境作りを考えていかないと、子どもは増えていかない。地方創生政策の議論でも、これが言われている。そういう意味では、これからの日本の大事な方針の一環に位置づけられていくと考えられる。

- ・委員

当館の初期の展示は、中学生以上を対象としていた感があったが、それが小学生や幼少期の子どもたちなど、対象が広がっている感がある。それに伴って、多世代対象にしたプログラム作りの必要性を、館職員も痛感されていると思う。しかも、それらが実現していないと思うので、この取り組みには期待したい。

・委員

子どもの視点に立って、体感しながら学べる、実物を持ってきて遊べるパッケージを作られていて素晴らしい。JSTによる事業は終わるけれども、継続的に活動していただいて、今後ご指導いただきたい。

・委員

私は、児童福祉を専門にしている。就園前の子ども対象に、いろいろなプログラムをといる話だったが、課題としては戸外遊びが少なくなっている、支援の対象が母親に限定されやすいということである。今までの報告を聞いていると、内容的に恐竜とか大きなイカとか、父親も関心を持ってもらえそうなものが見受けられた。それらと、子育て支援を関連させて、地域の中で展開していただきたい。

来年度計画に、幼稚園・保育園対象のキャラバンが挙がっていたが、主に0~3歳の就園前の子どもたちと両親を対象にした、子育て支援センターが各地に設置されている。そういう所も対象に含んでいただければ、大変ありがたい。

・委員

学校教育関係の立場から、教育普及事業について述べたい。

まず、「小さな学校キャラバン」だが、募集時期を2月から4月に、学校の実情に合わせて変更いただき、感謝している。ところが、へき地を対象にされているため、近隣の学校が活用できない。近くでももっと需要があるように思う。

また、展示の中でポピュラーなもの、例えば丹波竜などが、近くの小中学校の副教材に登場するようになれば、ここに来るのが毎年の恒例行事となるのではないか。そういう情報が、学校の教員の間で共有できるようになれば、いろんな形で活用するきっかけになる気がする。そんなことを企画してもらえればと思う。そういった企画の窓口が分かれば持ち込めるので、ぜひ考えて欲しい。

・委員

「ひとはく」に連携の相談で訪れた際、石川委員がお話しになったように、わかりやすい展示を心がけていて、子どもたちが遊び回っていて良いなと感じる。ただ、その割には中高生が少ないと思う。休日も部活等で忙しく、博物館に通えないのかもしれないが、図書館や公共施設で勉強している実態がある。

ひとはくは、海外の博物館との共同研究など、国際的な取り組みも数多くされていて、成果も上げられている。そういうものに触れて、中高生が自分の資質を伸ばしていくことが出来ないかと考える。具体には浮かばないが、生徒たちのエネルギーを刺激していければと思う。

・委員

連携グループに携わるものとして一言。

「かんちょう Kids キャラバン」に、あえて「館長」を冠したのは意味があるのか。利用者側からすると、従来のものとの違いが分からない。あえて打ち出した効果を、もう少し具体的に教えて欲しい。

- ・博物館

詳細は、後で研究員からお話しするが、博物館、美術館にもっとしっかり PR しろと。それで、知事が「それぞれの館長が何か取り組みをしろ」と言って立ち上げた事業である。企画した研究員は、私がいはい歩きの子どものことばかり言うものだから、そういう子どもたちがいる所に連れて行けば良いと思ったのだと、認識している。

- ・博物館

県立博物館・美術館の館長は、著名な方がいらっしゃるのでもっと前に出ていただくというのが、事業の趣旨である。

著名な先生が著名な先生を呼んで、対談するのも良いが、当館は自ら地域に出て行くことに力を入れている。また、この事業での館長はひらがなの「かんちょう」なので、ここにいらっしゃる館長と現場での「かんちょう」は、また違うと思う。すてきな事業になると思っている。そんな思いから、この事業を提案した。

- ・委員

ぜひ、ひらがなの「かんちょう」を現場に行き確認していただきたいと思う。

- ・委員

資料を見ていると、いろんな人が複数のテーマを担っている事に興味を持った。博物館は何人の人員がいくつの役割を果たすか、固定数ではない多方面で活躍できる人がいるか重要視されている。こんな分厚い資料ではなく、もっと数値化したものを提供して欲しい。

もう一つ興味を持ったのは、障がい者を前提にした研究をされていること。障がい者をどう迎え入れるかが大きな問題になってくる。その時には、障がい者が来られるようにならないと把握できないので、このプロジェクトはひとほくだけでなく、県内の博物館全体に刺激する内容に取り組んでおられると思う。

そう考えると、数値としては何人しか現れないが、性別・年齢・交通手段など多くの層があると思われる。その数値を活用して、どういう人が博物館にユーザーとして来ているかが把握でき、この館はここを掘り起こそうとしているとか、動向が見えるようなデータづくりが、県内の博物館同士で連携して出来ないかと思いを持っている。

アウトリーチについてのデータ収集も、自分の館ではなかなか出来ないのでも共有させて欲しい。

- ・委員

今回も、調査はされてますよね。

- ・博物館

今回提示した中期目標を示すに当たり、かなり細かな数値を取っている。

質問の趣旨に沿ってお答えすると、例えば、来館一般団体の数や小中高の数などは取っているが来館者の実態を的確に把握する調査については、課題を感じている。ましてや、非来館者調査に

については手つかずの状態なので、今後の課題として取り組んでいきたい。

中期目標では、20ほどの指標しか挙げられていないが、その3~5倍の項目についてデータは取っている。積極的に発信していないが、同じ博物館業界の方には公開したいと思っているので、活用していただきたい。

- ・委員

ぜひ、共有して活用していただきたい。

- ・委員

今回、初めて養父市から参加させていただいた。

廃校を活用したアート村のNPO団体の代表を務めているが、一昨年八木研究員とともに「アート昆虫展」を開催した。ワークショップでは150人という、但馬では奇跡的な人数の子どもに参加してもらった。

私も、かつては阪神間に住んでいたが、十数年前から大屋に住んでいる。養父市は、人口が2万6千人を切っていて、図書館もない。文化施設が乏しい。

私の本業は絵描きであるが、アートでの地域おこしに携わるようになってから、子どもの遊び場所・学ぶ場所がない事を痛感した。家で祖父母から、いろいろ教わっているのかと思っていたら、そうではなく引きこもってゲームをしている。野山がたくさんあるのに、危ないからといって走り回れない。環境はあるが、実態は都会の子と変わらない。

アート村としては、遊び場づくりに努めている。明延でも、こちらの研究員にお世話になり、外から人に来ていただいて場を作ったり、考える機会を与えていただいたりして、広がりが出来るかなと思った。この機会を活かして、但馬の人同士の絆づくり、場づくりをしていけたらと思う。

- ・委員

次世代の人の育成には、幼少期からの体験活動の重要性が、私も学生時代から痛感している。今年度から始まる、台湾での高校生交流事業については、参加者の心に何らかの種まきになればと思う。「かんちょう Kids キャラバン」も、どんな花が咲くかは分からないが、何らかの種になるのだろうと期待している。

民間バス事業者として、旅行も持っているので、そういった点で協力させていただいて、地域と民間とが連携できる事を願っている。

- ・委員

最後に、私から一点質問する。

基本計画の見直しで、平成28年度に100万円の予算が付いて、行革期間終了後の平成30年を見越してという話があった。これは、来年度だけではなく3年ほどかけてじっくり見直すという認識で良いのか。

- ・博物館

正直に申し上げると、どれくらいかかるか正確にお答えすることが難しい。

その理由の一つとして、開館以来24年経過して建物や展示が老朽化・陳腐化しており、それらを修理しながら使っていかなければならない事が、背景にある。その中で、どういう形で展示や資料を考えていくかが、館職員にとって重要であるが、先に館長が申し上げたように博物館の活動領域が、完全に定義され尽くしたものではないので、基本的な博物館業務に加え、どういう機能を盛り込むかに関しては、もう少し議論が必要である。

それを来年度だけでやってしまうのは無理だと思うが、全てが出来ないと計画が出来ないわけではないので、同時並行で作業を進めていきたいと思っている。

もう一点は、今までのものづくりが通用しない時代になってきていると感じている。県が予算を付け、作ってしまうやり方ではなく、地域や民間との連携、施設がない方との連携、はいはいの子どもたちとの連携を、博物館を作る段階から考える必要がある。

はいはいの子どもたちとの連携は難しいが、例えば当館には託児所がない。それを作るにはこども園などの施設の方と相談するしかない。机上の計画から、事業を媒体にしたソフト展開を、段階的に取り組んでいく必要があると考える。

とりあえず、年ごとの結論は出していくが、私個人としては課題に答えていくには、まだしばらく時間がかかると思っている。

- ・ 委員

ぜひ、その方向で進めていただきたい。

- ・ 博物館

今年は県から、海外視察調査に予算を付けていただいた。海外博物館の視察に行かなくなって久しいが、私は1月にアメリカのサンディエゴからカナダのバンクーバーまで、視察に行ってきた。アメリカの博物館は、大改革のまっただ中だった。ハード・ソフト、博物館自体をどう作っていくのかという時代に、日本もさしかかりつつあるのかと感じた。

今日は、委員の皆さんからいただいた意見で、日本の潮流の中でひとはくがどう進むべきかのアイデアを、たくさんいただいたと思う。

本日は、ありがとうございました。